



説教要旨「人から何と見られても」

ルカによる福音書 22章24～30節

ルカ福音書が描く最後の晚餐の場面。そこでは、イエス様が目前に迫るご自身の十字架上の死を見つめている、その傍らで、弟子たちは誰が一番偉い弟子かと論じています。同じような構図の場面が以前にもありました。ルカ福音書9章44節で、イエス様がご自分の死を弟子たちに予告された直後、弟子たちはこの時も同じように、誰が一番偉いのかと論じていました。

なんとも情けない話です。しかもこれは福音書に描かれる弟子たちだけの問題ではなく、その後の教会の歴史においても繰り返し幾度となく表れてくるのです。2000年にも及ぶその歴史の中でキリスト教会は幾度となく分裂を繰り返してきました。西方教会と東方教会との教会分裂もその一つの表れです。ローマ・カトリック教会では三人の教皇が鼎立していたこともあります。また、16世紀の宗教改革というのも、ローマ教皇の権力に対しての否という面で見ることとも出来るかと思えます。

「誰が一番偉いのか」。これは心底愚かな議論のように思うのですが、教会の歴史を見ると、そこから抜け出すことがいかに困難なことであるかを認めないわけにはいかないでしょう。そしてそれは、私たちにとっても他人事ではありません。そのように逃れ得ない“罪”を抱え、見にくい醜態をさらす弟子たちに、そして私たちに「上に立つ人は、仕える者のようにになりなさい。」(26節)と、イエス様は道を示して下さったのです。人の上に立つ者こそ、そこで権力をふるうのではなく、人に仕える者として生きる。この新しい生き方を、イエス様は言葉だけでなく、その身をもって私たちに示してくださいました。

イエス様が、地上のものすべての上に立たれるお方でありながら、この地上で最も弱い人々、貧しい人々に仕えて歩まれました。そのために世の権力者たちから憎まれ、弟子たちにさえ裏切られ、孤独に、十字架への道を歩まれたのです。イエス様ご自身が、徹底して“人に仕える道”を歩まれ、その上で、わたしに倣う者となれ、仕える者となれ、そう示して下さっているのです。このみ言葉にどう応えていくのか。いま、問われています。